

英語学習における音読の効用

熊野 騏一郎

なにかいかめしい題になったが、それほど学問的なことを考えているわけではない。ただ、なが年英語を教えていて、経験的にどうも日本の学生は英語の音読が苦手であり、それがひいては語学の修得の障害になっているのではないかという思いがあるので、その辺のことをすこし考えてみたいだけである。実際教室で学生に英文テキストを音読してもらっているとき、いらいらしながら読み終るのを待つことがあまりに多い。予定したページ数を確かめながら、今日もまた半分か、と暗然たる気持になるのである。

学生が英文を早口で読めない理由は、もちろんその内容を十分理解していないことと関係しているが、一概にそうともいい切れないこともある。英文をしどろもどろで読みおえた学生が、準備したその箇所の見事な訳文を口早に発表することもあるし、稀なことだがその反対の例もある。数年前、スペイン語学科のある英語クラスを担当していたとき、女子学生にJ. アップダイクの作品の一部を読んでもらったことがあった。周知のように、この作家の文章は得てして難解だが、その学生は外人の口調そっくりに見事に読みきったのである。呆気にとられて聞き惚れたあとで彼女に質問してみたが、べつに海外生活の体験があるわけではなく、アメリカのポップ音楽が好きで日頃から英語の歌詞を口ずさんでいるだけであることが判った。ところでこの学生の訳文は、期待に反してまことに稚拙なものであった。

英文の内容理解がかなり正確でも発音がてんで駄目な学生と、流暢に音読できても内容に疎い学生と、このどちらがよいかといった問題ではないだろう。どちらも片手落ちだからである。しかし外国語修得のプロセスからいえば、後者がより正道についていると言ってもよいのではないか。日

本古来の漢文素読に近いこの言語アプローチは、外国語が本来アクセント、抑揚、一定のスピードをもった音の連りであり、音楽に近いものであることを無意識的に了解した方法であるといえよう。百遍読めば意はずから通じる、という具合にはなかなかゆかないが、言語修得にはそうした無意識的領域が大きいこともわれわれの経験の事実である。

英文テキストを外人と同じくらい早口で、方法的にはそれよりも早口に音読する習慣をもつことは、いくつかの効用があるように思われる。例の「修辭的残像」をもちだすまでもなく、この方法は英文の内容理解をたすけるし、またなによりも、臆気ながら文の構成そのものを洞察しなければ早口で音読はできないのである。また、音声学的にも、一定の長さの英文を早口で読むためには英語固有の発声法一舌、唇、口蓋の使い方一を要求されるのではあるまいか。しかし、この訓練のもっとも大きい効用は、ヒヤリング能力が向上することであろう。日頃から早口の音読に習熟しておれば、外人からそれを聞かされてもすこしは容易に理解できるはずである。逆に発声はしどろもどろで、聞きわけるほうだけは達者でありたいというのは虫がいい話である。レコードから音楽を正しく聴きだすためには、まず回転数を合わせなければならない。

こんなことをいろいろ考えていると、いつの日か教室で「音読演習」でも試みようかという気持になる。難易とりまぜた一ページほど英文テキストを学生に与え、誰が早口で正確に音読できるかをストップ・ウォッチで計測して競わせるのである。しかし現実には、今日もまた予定したページ数の消化を心配しながら教室へ向うことになる。